

Title	ハインリヒ・マンの戯曲「権力への道」
Sub Title	Heinrich Manns Drama Der Weg zur Macht
Author	坂口, 尚史(Sakaguchi, Naofumi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2001
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.81, (2001. 12) ,p.213(200)- 224(189)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	宮下啓三教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00810001-0224

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハインリヒ・マンの戯曲「権力への道」

坂口 尚史

1

この戯曲は1917年から1918年にかけて執筆され、ナポレオン・ボナパルト (Napoleon Bonaparte 1769-1821) を主人公としている。しかし原作中に Napoleon の名は見当らず、研究論文はこの作品を das Drama Bonapartes としている。⁽¹⁾

ハインリヒ・マンの演劇作品は Schauspiele のタイトルのもとに1952年東独から選集の一巻として出版され、これと同じ内容で1986年に西ドイツからも出た。⁽²⁾Singspiel の《Bibi》を含め10篇が含まれている。それぞれの作品は上演されたが、「ルグロ夫人」などわずかの例を除いて、大きな成功を勝ち得たことはあまりないといってよい。

作者の本領は長篇小説と短篇小説にあり、自らそれを認めてこう述べている。——「演劇について私は長編小説ほどの苦労はしていない。長編小説の方は何年もかかるが、ドラマは一作せいぜい数週間でき上る。会話はひとりでに出てきた。」(1943年の自伝的な文章から)⁽³⁾ドラマが書かれたのは1909年(作者38歳)から1923年までであり、「暴君」、「罪なき女」、「ヴァリエテ」の三作が Drei Akte としてまとめられ、1910年11月、ベルリンの小劇場で初演されている。次いで1911年初演の「女優」(これは同名の小説のドラマ化である)、1912年初演の「偉大なる愛」とつづく。女優は妹カルラ・マンを想定した芸術家の問題を扱っていた。ここにとりあげる「権力への道」(Der Weg zur Macht) には、俳優も登場するが、そ

れよりもむしろ歴史的社会的なテーマをもっている。1913年に執筆され、1917年ミュンヘンとリュウベックで初演された「ルグロ夫人」とともにフランス革命時代のパリを舞台にしている。両作品には関連があり、フランス革命の始めと終りを描いているのである。フランス革命200年の1989年に出た Heinrich Mann Jahrbuch 7は、Heinrich Mann, die Französische Revolution und Europa を総タイトルとし、リュウベックで4月に行なわれたシンポジウムの報告を数多く載せているが、Peter Hasubek は、「ルグロ夫人」は大革命の Vorklang であり、「権力への道」は Ausklang であると述べている。⁽⁴⁾

ハインリヒ・マンはフランスの文化にその教養の多くを負っていた。フランス革命については、歴史家ジュール・ミシュレ (Jules Michelet 1798-1874) の7巻からなる大著「フランス革命の歴史」を詳しく読んでいた。そしてまず、その中に出ているパリの婦人帽づくりの職人女性の口を通じて、1789年バスチーユ牢獄を襲撃するに至った民衆の心を描いた。⁽⁵⁾この作品はベルリン初演 (1917年4月) の際にアルフレート・ケルなどに好意的な批評をうけた。この成功に勇気づけられた作者は、ロベスピエールが1794年に処刑された後の1795年という時期を定め、まだ若いボナパルトを登場させ、国民議会 (Konvent) の議員や俳優、兵士、夫人たち (その中には1796年にボナパルトと結婚したジョゼフィーヌ・ド・ボアルネも含まれる) といった周囲の人々の群像をつくり、一口で表現すれば、フランス革命の偉大な理想であった「自由、平等、博愛」(Freiheit, Gleichheit, Brüderlichkeit) がいかに裏切られたかを、3幕30場にまとめて聴衆に訴えようとしたのである。

もうひとつ見落せないのは、Schauspiele の一巻を編集し、詳細な「あとがき」を執筆しているアルフレート・カントロヴィッチュも指摘しているように、このドラマが1920年の10月21日にミュンヘンのレジデンツ・テアターで初演されたことであって、フランス革命の終音をひびかせつつ実は、終わったばかりのドイツ革命 (1918-19) の結果とワイマル共和国の始めを検証することが、作者の目的であったと思われる。すなわち、ドイ

ツにおける社会的政治的な事件を含めた脈絡の中で、この作品が読まれなければならない。

ボナパルトの生涯と業績についてハインリヒはどのように見ていたのだろうか。1769年にコルシカ島の小地主の家に生まれたボナパルトは、フランス革命の後を受けついで、新しい社会を安定させたとされており、軍事的天才を発揮するとともに内政にも優れた手腕を発揮した。最初フランスのブリエンヌ兵学校などに学んで砲兵士官になった。やがて20歳のときにフランス革命が起こってアンシャン・レジームが崩壊し、貧乏士官ボナパルトは頭角を現した。1793年に反革命の手中にあった南フランスのトゥーロン港の攻囲戦で名をあげ、次に1795年にはバラス（Barras）の指示でパリの王党派反乱を制圧し（ヴァンデミエール事件）、中央政界でも認められることになる。ときにボナパルト26歳であった。ハインリヒはこのときのボナパルトをテーマに選んだ。そしてドラマ初演の翌年にあたる1921年5月ナポレオン死後100年に際して「市民の英雄」と題するエッセイを発表して、若き日のボナパルトについて次のように述べている。

「彼はただ征服し支配するために、また意味のない幾多の戦いに勝つために、コルシカ島からやってきたのではなかった。（中略）自分で途方もないその肖像をつくり出した権力は、しかし彼の本当の女神ではなかった。彼は幸運にも敗北したすべての人々の敵のように、セント・ヘレナ島で生涯を終えるためにコルシカ島を出てきたのではなかった。彼は自身の偉大さを感じたとき、革命の他の息子たちに勝るとも劣らないほどに、若く激しい心の中で、全人類の偉大さを感じていたのだ。彼の感情は他の誰よりも火山のように燃えていた。」⁶⁾

この解説はドラマとは多少ずれている。彼のこの感情が、エッセイのその先に述べられているように、「超人間的な野心」になっていく過程、皮肉にみちたマイナーな人間になっていく過程それがこのドラマなのだと思う。ドラマの各場面を追いながら、この点を調べてみよう。

このドラマには多数の人物が登場する。国民議会の指導的な委員会のメンバーとして10人、そのうちの三人の夫人とポアルネー夫人それにコルネリア・デュプレー。若者ミュスカ、俳優タルマ、兵士のジュノー。その他に民衆、兵士、小さい黒人、貴族の従者たち等である。それぞれのセリフは短かく、トーマス・マンの「フィオレンツァ」のような長大なセリフはない。短かい各場面の会話から状況が少しづつ明らかになる構成をとっている。ミシュレの「フランス革命史」(中央公論社『世界の名著』37)巻末の人名索引をみると、約半数の名前がみつかる。この訳書は抄訳であるので、原書を読めばもっと名前がみつかるかもしれない。委員会の主要メンバーは40~50歳ぐらいの人物が多く、(ジャン)タリアン(Tallien)などは若い方で、ロベスピエールを失脚させたテルミドール9日の首謀者のひとりである。反動後の指導者であるがナポレオンのもとでは失意の日を送ったとされている。バラスもテルミドール公会軍の司令官として功があったが、彼の庇護で立身したナポレオンに権力を奪われた。一方、議長席についていたボワシ・ダングラ(Boissy d'Anglas)はテルミドール反動後王党派にかたむくが、ナポレオンのもとで元老院の議員、伯爵に列せられ優遇された人物である。それぞれの人物に思わくがあり、誠実なトゥロー(Thureau)のような人もいれば、心がぐらついているブリエンヌ(Bourriene)(この二人はドラマの中で失脚する)、株の相場師であるコロ(Collot)、買収されやすいタリヤンやバラスなどボナパルトをめぐる転回する人物像、打算などハインリヒの得意な性格づけが興味深い。

第一幕はパリのブリエンヌ氏のサロンである。冒頭からロベスピエール時代の、恐怖政治といわれた戦慄の思い出が語られる。断頭台に送られた人々のことがあり、「あの舞踏会で、幾人かが首のまわりに赤い帯状の布をまいていた。まるで彼らが一度その首をなくしたかのように。」という若者ミュスカの言葉に、「おそろしいことね」とブリエンヌ夫人がもらす。(310)そのような雰囲気の中に、共和国は大丈夫なのかという不安があ

る。第二場からボナパルトが登場する。その前にやりとりがありブリエンヌはここで自分が温和な共和主義者であることを強調したが、それはトゥローに、「君たち王党派が選挙をわがものにしようとした」(312)と非難されたからである。政府の主脳部に買収されそうな人物がいて、バラスやタリアンが槍玉に挙げられている。

第二場のト書によれば、ボナパルトは「中背で、やせており、ムーア人のタイプ。髪はポマードをつけた黒い束となって肩に垂れている。両眼は暗く燃えており、白い丈夫な歯をもっている。服装はみすぼらしい。」(312)彼は国民議会の人々に迎えられる。ブリエンヌは部屋の隅から姿をみせたボナパルトに、Unser Freund Bonaparte! と声をかけ抱擁する。彼の名は、彼自らが言っているように、トゥーロン港の攻囲戦以来よく知られていた。彼は言う。Mein Name ist in aller Mund seit Toulon. (316) 反革命の手中にあったトゥーロン港を攻略したのであるから、共和国のために働いてくれるはずの人なのであるが、ドラマの始めから人々はまだ彼の実力をはかりかねていた。第三場においてトゥロー夫人はボナパルトに懐疑的になり、夫のトゥローに次のように言う。

Madame Thureau: Laß dich nicht mit jenem Bonaparte ein!

Thureau: Was weißt du?

Madame Thureau: Er hat Heimlichkeiten hier im Hause. (317)

ボナパルトには何か不可解な「秘密」があるとトゥロー夫人は感じていた。一方逆に、第四場におけるブリエンヌ夫人エミリーのよう、彼に好意的な態度を示す夫人もいる。ブリエンヌも彼が将軍 (General) になってほしいと思っていて、彼もそれを期待している。そうなったら、彼は彼の共和国の首を切るかもしれないとブリエンヌは思う。コロは、「弱者たちの党派」に属し、金次第でどちらに転ぶかわからない。ボナパルトは果たして共和国を救うのか、そうではないのかがまだ未定である。ブリエンヌ夫人の心からの声がきかれる。「お願いだから争いはやめて! あなた方の敵意、あなたがたの野心が私たちすべてに不幸をもたらすでしょう。」(320) ボナパルトはまだ憂鬱な日を送っている。彼はゲーテの「ヴェルタ

一」を読んでいた。

第六場は第一幕の中でも印象に残る場面である。ボナパルトはブリエンヌ夫人と二人でいるが、空腹をおぼえ食事を出してもらう。ワインを飲みながら彼はブリエンヌ夫人に平和な夢を語る。河のほとりを歩いていたら、トゥーロンの仲間だった下士官のジュノーに出会って金もらった。ジュノーは穀物の取りひきをしてお金をもっている。彼といっしょにこの向いの家に住めたらいいのという夢である。しかし今、彼の気持ちは少しづつ変わってきていた。ブリエンヌ夫人に向かって彼は告白している。

Bonaparte: So gut bin ich nicht mehr. So gut, so rein war ich mit fünfzehn Jahren. Damals wollte ich sterben——aus Freiheitsliebe und weil ich fühlte, in dieser Welt muß sie verlorengehen. (322)

自分はもはや善良ではない。過去15年間は大変善良で、純粹で、自由への愛のために死のうとすら思った。そしてそう感じたから、今この世界で自由への愛は敗北して消え去らなければならない、と。彼は大臣に手紙を送り、イタリアにいる軍に関するプランを伝えていたが、大臣はまだそれを公表しようとはしなかった。ひとまず今は共和国の要求にそって、名声をあげたいところだ。第七場でトゥローがそのプランを推進したいことを伝えた。イタリアにいる軍の司令官になれるかどうか、第七場でも彼はブリエンヌ夫人にたずねている。数多いボナパルトの伝記は、1795年10月5日パリの王党派蜂起を壊滅させた功により、1796年3月2日、イタリア軍の司令官に任命され、97年にかけて北イタリアへの出兵の結果、カンポ＝フォルミオの和訳に至る経緯を、権力へと向かう彼の道としてしるしている。第9場に俳優のタルマが登場する。この戯曲中注目すべき人物であるが、年齢も近く「青い上着に黒いズボンと靴下」を身につけ「ラファエロのような姿勢」(328)をとったこの若者にボナパルトは親近感をいだいている。彼はシーザーを暗殺したブルータスの役を演じるという。シーザーを倒して自分が権力の座につくという役はボナパルトの志向と重なっていて興味深い。さらにおもしろいのは、第一幕が終る第十場で、コロとボナパルトの話の背後から、いったん姿を消したタルマがまた現れて、コルネ

(194)

イユのドラマの詩句を歌うように、リズムをもって語る場面である。ブルータスのセリフであることは明らかである。

私は言った、友人たちよ、今日偉大な日が実現する、
我々の高貴な計画が実行に移され、あきらかになるのだ、
ローマの運命を天は我々に託した…… (331)

コロは財力の大切さを強調するのを忘れなかった。彼は「市民の英雄」を期待している。以上が第一幕の大まかななりゆきであるが、ボナパルト像には英雄像とは異なる部分がある。まず、この戯曲におけるナポレオンは、天才として描かれているのでもなければ、カリスマ的な魅力をもった人物としても描かれていない。1921年のエッセイ「市民の英雄」がこの見方を補強している。このエッセイは、かつてドイツ皇帝ウィルヘルムII世が、帝位についた初期の頃に、皇帝ナポレオンを「成り上り者」とよんだエピソードから説きおこし、人があまり強調しない点として、「前進する彼のやり方は成金の市民的であった」と述べている。ハインリヒのナポレオン観はその後かなり変化していくのであるが、ここでは後の肯定的な観点については述べない。市民として無名だったボナパルトは、もはや善良ではなくなり、首都パリで勢力拡大のチャンスをおらっていた。第二幕においてその過程がわかる。国民議会内部の勢力争いにおいて、バラスやタリアンが勝利を占め、トゥローやブリエンヌは失脚した。トゥーロン攻囲のとき以来の忠実な部下ジュノーや兵士たちの力を借りて、トゥローを殺し、ブリエンヌを牢獄へおくった。トゥロー夫人の悪い予感が的中し、ブリエンヌ夫人も怒りをあらわして彼から離れていった。ボナパルトに演じるべき役割を与えたバラスが言う。「あなたの道はもう見失なわれることはない、ボナパルトさん。その道は死体によって印がつけられていく。」すでに将軍であったボナパルトは、「伯爵、私は神とともにその道を行きます」と答えた。(354)

彼に権力への道をひらいたものはあと二つある。その一つはコロが言った財力である。権力を握ろうとする者にお金を調達する人物はハインリ

ヒ・マンの小説によく登場する。第二幕第三場で、コロはボナパルトによく昼食代を貸したことをバラスに語っている。(342) 第一幕でも「お金の兵士」といっており、(332)、第三幕第八場でもコロはボナパルトを「お金の將軍」とよんでいる。(372) コロはボナパルトを支える最も重要な人物の一人として登場しているのである。

ボナパルト將軍の名はしだいにひろまっていくが、その名声は上流社会にまで達していなかった。もう一つは社会的な地位である。彼は総裁に選挙されたばかりのバラスのリュクサンプル宮の住居（このドラマには出てこない）に出入りし、そこで流行界の女王タリアン夫人とジョゼフィーヌ・ド・ポアルネに出会った。ジョゼフィーヌは將軍アレクサンドル・ド・ポアルネ子爵の未亡人であり、世間からはバラスの愛人だと思われていた。ボナパルトはたちまちジョゼフィーヌの魅力に心を奪われた。このドラマでは33歳の夫人として出ており、自らを *eine auständige Frau* とよんでいる。彼女は彼の愛を受け入れた。直前にタリアン夫人から「小男」(*der Kleine*) とよばれて怒りに体をふるわせていた直後であった。Naiver Bauer とポアルネ夫人からよばれていた男が、「上品な」貴族夫人の愛を得たのである。

3

1795年の場面だけをとりあげた、この戯曲で問題となるのは、ボナパルトにおいていかなる英雄像が示されているかということであろう。彼はロベスピエール亡き後の、共和国は大丈夫かと思われていた時期にパリにあらわれた。トゥーロン攻囲戦でその名が少しは知られていたがまだその実力が未知数という時期であった。フランス革命の力が弱くなってきた時期であり、状況は混沌としている。ボナパルト像はこの作品において、天才的でもなければカリスマ的でもない、非英雄的な人間像として示されている。平均的な人間であり、「市民の英雄」である。

ハインリヒ・マンは、ミュンヘンでの初演の際に、この作品に関して作者の意図を書き残している。Sigrid Anger 編で1977年に Aufbau 社から

出版された Heinrich Mann 1871-1950に収録されており、3ページほどの小文であるが、まず主人公は「彼の時代の人間」のようにみえると述べている。⁽⁷⁾「彼の才能と業績は到底すべて肯定できるものではなく、多くのものを彼は自分から除去しなければならない。」このことから、この作品は天才崇拜にとって不利である。「偉大な個性はその崇拜者からみれば分断されない奇蹟のように思われるのであって、長い勘定書を分析して分けられるような額として考えられてはいない」のである。

このドラマには18世紀末のパリにいた人々が登場するが、男たちはみんな「少しばかり無頼漢でもある」という。そして「心の奥底に憧れの火花」をもっているのである。タリアンしかり、バラスしかりであるが、ボナパルトその人も、他の人物に劣らず無頼漢の要素をもっている。しかし、そこからボナパルトに野心が生まれる。

第一幕と第三幕の俳優タルマとの会話は、ボナパルトその人に俳優的な素質があることをうかがわせる。その素質は彼の出世に大いに役立った。第三幕第九場でまた会った二人の一方は、「国民劇場最初の若き主人公」であり、もう一方は「パリの司令官」であった。ここまできた二人の道はしかし平坦ではなかった。タルマは劇場と契約するやいなや、シーザー役を嫉妬深い男に譲り渡したが、その男がさんざん打ちのめされて今ベッドにいる。それでその役を今自分がしている話をする。ボナパルトは、「それはかなり汚い事件だ」と言った。タルマは「君の事件が私の脳裏にうかぶ」(373)と返事をした。「権力への道」は汚されている。二人は靴をよごしながらその道を歩いて行かなければならない。ボナパルトは国を愛する心からそうしたいと語っているが、ペーター・ハズベック論文は、ニーチェの言葉「権力への意志」との関連をこの作品について指摘している。この指摘は当を得ており、戯曲の題からしてこの言葉を連想させるほどである。ニーチェの著作「善悪の彼岸」や遺稿集などに、例えば「権力の意志を本質とするこの世界」(「善悪の彼岸」186)といった表現が多数ある。⁽⁸⁾ハインリヒ・マンのニーチェ受容については稿を改めなければならないが、先に引用したこの作品へのコメントの次の一部はニーチェの文の

応用である。――

「権力への衝動、それは奇妙で矛盾にみちていて生への意志を極端に強めたり否定したりするが、刺激を受けたり危険にさらされた時期に巨大な形で出現する。」⁽⁹⁾

このコメントは作品のテーマを示している。その権力への衝動につき動かされて、ボナパルトの心に野心が起きた。しかしその衝動に動かされているのはボナパルトだけであろうか。作者のいう無頼漢じみた人物たち、バラスにしてもタリアンにしても、俳優のタルマにしてもみんなこの衝動に動かされている。ロベスピエール亡きあと、最も強く共和国の思想をもっていたトゥローもその一人であったが、殺されてしまった。

彼のような人物を殺すことによって、「自由、平等、博愛」の精神は裏切られることになったのである。テルミドール第9日事件に参加してロベスピエールをはじめとする20人余を処刑してしまった多くの人々は、それを後悔しなかったであろうか。もちろんロベスピエールはその恐怖政治のために憎しみを買ったのであるが、ボナパルトは1791年の夏ヴァランスにおいてジャコバン・クラブに入会している。この政治結社は小ブルジョアの性格がつよくジロンド党に対立し、93年からロベスピエールにひきいられて独裁権力をにぎる。しかし94年テルミドール九日（7月27日）反ジャコバン勢力に倒され、ここで革命の民主的上昇に終止符がうたれた。そしてボナパルトは、ロベスピエール派の陰謀に協力したとみられて二週間投獄されたことがある。このドラマに登場するボナパルトは一年前にこのような体験をしていた。アンリ・カルヴェの著書「ナポレオン」では、1795年のボナパルトを、「よわよわしいシルエット、貧窮にすりきれた衣服、不安定な未来への焦慮にやつれた顔、やせたほおに乱れてふりかかる黒い長髪、すれちがったものは誰でも思い出すようなあの『火のまなざし』」と記している。⁽¹⁰⁾ほぼハインリヒ・マンのト書きと一致している。不安定な危険な時代に、主役を演じたのは実は「権力への意志」であった。

この視点をドイツにおける19世紀末からワイマル共和国時代までの期間

に移してみるとどうなるであろうか。ユルゲン・ハウプトは、この戯曲におけるボナパルトを「名声を求めるエゴイスティックな、精神性に乏しい喜劇役者」ととらえ、(Komödiant は第二幕でタリアン夫人が発する言葉である)、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世とパラレルな関係にあるとみている。⁽¹¹⁾それもあるだろう。

民主的上昇がとめられたフランス革命末期とパラレルに考えられているのは、1918年11月のドイツである。ドイツ革命は当初から裏切られていたとハインリヒは考えている。純粋な共和主義者(ドラマのトゥローのような)が育たず、悪徳商人や相場師、墮落した、自分の利益のためならどんなことでもする野心的な將軍、反革命的なグループと結託した政治家たちが、ワイマル共和国の民主主義的な前進を阻止していた。このような状況は、1921年から28年までの七年間の共和国を描いたエッセイ集「七年」において詳しく述べられている。⁽¹²⁾このドラマはそのテーマの先駆をなす作品であると評価できるのである。「権力への道」は、1795年においても、1918年においても、マイナスの意味をもって考察されているのである。

注

- (1) Text + kritik, Sonderband Heinrich Mann, Herg. von Heinz Ludwig Arnold, 1971 München, S. 95.
- (2) テキストとしてこの版を使用した。
Heinrich Mann: Schauspiele, 1986 Düsseldorf, S. 307-376. テキストからの引用頁数は()で示した。
- (3) Text 巻末の Alfred Kantorowicz による Nachwort による。S. 622
- (4) Peter Hasubek: „Seit diesem Ausbruch des Besseren im Menschen ist alles möglich...“ Heinrich Manns Dramen „Madame Legros“ und „Der Weg zur Macht“ und die Französische Revolution. In: Heinrich Mann Jahrbuch 7/1989 Lübeck, S. 220.
- (5) このドラマについては法学部「教養論叢」第117号「鐵野善資先生退職記念号」に小論を発表する予定である。
- (6) Heinrich Mann: Der bürgerliche Held, In: Sieben Jahre, Chronik der Gedanken und Vorgänge, 1994 Frankfurt am Main S. 27-32.
- (7) Heinrich Mann 1871-1950 Werk und Leben in Dokumenten und

Bildern, Mit unveröffentlichten Manuskripten und Briefen aus dem Nachlaß, Hrsg. von Sigrid Anger, 1977 Berlin und Weimar, S. 170-173.

- (8) Friedrich Nietzsche: Sämtliche Werke, Kritische Studienausgabe Band 5, S. 107.
- (9) Heinrich Mann 1871-1950, S. 171.
- (10) アンリ・カルヴェ著「ナポレオン」井上幸治訳 1969 白水社(文庫クセジュ) 第二章「革命的将軍」27頁。
- (11) Jürgen Haupt: Heinrich Mann, 1980 Tübingen, S. 73.
- (12) Heinrich Mann: Sieben Jahre, エッセイ集。その中でも「1923年の悲劇」などが代表的である。1924年の「ナポレオンの思い出」(Die Memoiren Napoleons) は小論のテーマとは異なり、偉大なその生涯を敬愛の気持で回想している。

〈追記〉

1963年に独文専攻に入って宮下啓三先生に Wolfgang Borchert の短篇を講読していただいて38年になる。そして今月24日通信教育部の夏期スクーリングの最終講義を終えられて受講者から花束を受けとっておられるお姿を目撃した。長年にわたって名講義をされたことに敬意を表したい。ドイツ演劇を専攻された先生に、Dramatiker としてはあまり知られていないハインリヒ・マンのドラマを論じた小文をささげる。「権力」(Macht) というテーマはハインリヒの小説においても多数の Variant があり興味深い。ニーチェの「権力への意志」の受容などさらに研究を続けたい。(2001年8月末日)